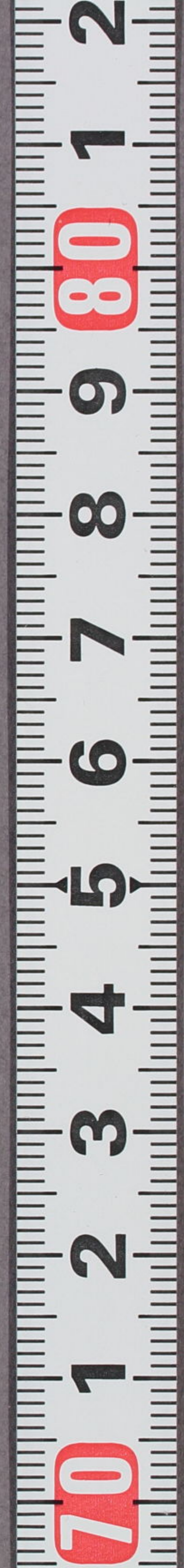


掌中其角發句集

全





掌中其角叢句集

春之部

日の暮城さきうよ勢乃何由と云

題黄金

目下多き守一万牧と時代の春

神の所よ居をうかす

ゆめむの招もかきとれあけり水

4



しつゝのや家中結礼と星月夜  
歩走路が<sup>サ</sup>野<sup>テ</sup>をこのや春の物ねひ  
蓬萊の淡

崎をそと三の書院乃かやまき

あつたふ

こちうとも女房もせんおれひ  
るのまや額よりなる扇と季

宝引の櫻

保昌のちうひくねと朋あつり  
蛭子帯かきとり帳乃三枚目

大悪殿のいさあ戸をそ持送しよ

年祓の櫛かぬにぬく小櫃あ那

景清の世帯見えぬや二暮

百人の雪かきあふ一暮り

砂柱の水菜もあつり初あ菜

島々<sup>二</sup>路巾<sup>一</sup>ふふちうりあ菜指



長嘯の記とおもひ出さ

土手踊るらりんをひけふ菜摘うれ

正月廿日冠里公尔侍府

菜刻との上手と捲る 蕨の那

新三十三間堂

美の草やこふふの葉見えも木綿賣

まのうーした枝のさげぬや毒乃る

う知ろ草や乞食のあものそらう

芭蕉翁百ヶ日懐舊

墨のう知草やむくー思昔うね

氷肌玉骨とくや

そのしみー草も香にも梅の皮

うひひの身を逆りーちつ子ね

常と心くそのんをぬ 杉 瘦

色蕪庵とくひく

定く比草や十日もてもねちうーく免



管下 茶をくへん 夢のたや

柳上路の馬車

さうりすよ 鴉が羽 彩るる柳 式  
あられるを ばききく ぬ柳うた  
地牛 夏のと けのりよ ちれま  
風形 けよま けぬ ちちま  
ふ 魚や 漁翁 ち 函ふ けひま  
あしう ぬの色 のをま けの川り け

二月十七日原驛

富士の権都乃大夫 じんき 養ん  
治徳岩城よ 逗留し け 餓別の句  
なきを眼く 笑へ けりよ  
松雪や 志戸かきむと け け  
不二の陰よ のをま け  
三帆舟ハ 塩尻 け け け  
みのけよ のをま け



孫とてその蚕やしかりふ日向う那  
るるさめや桑の香よ疎ふま枝尾強  
春雨やひりてそのあを枯つし

三物小沼井村親孝守納

如き橋や 軒もろくは春日親  
伶人忠門まのうーやまのうゑ  
たひろーや太邪まへひとつろそ  
者勢やと糸はさきて種下し

守納

金柑や冬青よけしとも 縮荷山  
爰よりふはる水うへ 水月寺

水忌

人の世や然とつたる月の寺とほし

授記品無有魔事

くありしうあしう、彼岸の夕日親  
不生不滅のころ海と



海棠の斬を悟きぬらん像

二月十五日上京発足

西行の死出跡を旅のまじり  
寒食や竈下り、猫の目せ怪しむ  
今東より此寒食の家より、自兜番  
すしつくと猫やつも、はくし  
山里の心も、やうらうらや、作獨活  
兼屑小瓶、狐見えまゝ、くはく、

細うちうち、細うち、あゝ那

この両冬、あゝこのまゝ、人日次り

本多総妙公母

まきの秋や、糸井の鞍、あゝ夢をうり

悼後志、初春を女

昔のなまの音、三井寺、あゝ春

引くまゝ、あゝこのまゝ、春の駒

画償



浦島うたをりのまきの轆の巻  
たのあろし俵よと守小櫓の船

禁固破りく暇と玉ハル

破やんかき以限状又破るめ  
やふ入やそれといふをみは星

画墳

拾得の風巾より母や玉簾  
あつあつや江戸とまればぬ風巾

柳燕の図

乙鳥の暮やうこす柳うた  
流はりの虹虹きしと燕うた  
うけくした顔うと雛子の跡は

角田川

あられも其子と尋ねる雛子のあ  
倍よいふらぬわさくし呼子鳥  
花さそふ桃や新音妓の服漏り



酸と桃李の待人 鶯花志らく  
 菓子盃と老しし人 形也を結花  
 鶏の柳子牙はさくく 逆毛か  
 順稗ハと風よとむむや 鶏わふせ  
 老鳥の老きよこのささぬ 固本丹  
 王子曲水わらわられく  
 水呑翁鳥帽子小きせん 岩つり  
 曲水より河の氣遠く茶碗の如

みく結もや 盃了ぬむち大松浦舟  
 上流より 雛花はさくこの新ちり  
 うり云をひたりし河のさめ 鹿の母  
 風の動れ 清水飯取 一目り那  
 永代島八幡宮奉納  
 沙丁也たつみくまふれ 以所貝  
 靱子もむ比目と踏ん 沙丁も  
 海老もさお浪結の老さるり 貝



妙鏡坊より花送る道しよ

夕ハめし木橋片し出ま使の那

上野清水寺より

残るけしとてのも盛跡はらるる

折よ殺生偷盗あり

何と也と死小五戒忠さるる

おまはつくともその中を教もはらるる

上野あり

浮助や扈從よりゆく橋寺

護国寺より何そふ耐るゆき遠へらる

ふもや花ふたりゆく鳥を嗟峨

それさより飄きさるる人もあり

大佛膝らの草らんもあかき

世の花や五年に前乃女とる

立君せりしはぬ

さ終ありゆくまを下人よ花とるも



徳利瓶人のこりーや花のよき  
花さのり子さのりー夫婦  
人を人を愛のさるーや花よき

雑司ヶ谷

山里ハ人城のりー花見  
花折る人の孫のりー  
花ハ都をのりー花ハ都のりー  
かんさーや花のりー

三月正當三十日

や戸ぬきも柳乃系張るーみ

浅草川道遥

狸の茂ハ山さのりー  
小鳥のりー豆腐を切る捨る  
きり志ま平豆腐を切る捨る  
水新や龍のりーぬち  
とそにみぬるの五徳やあちの



綿糸をば 夏風ハ憎かりし

秋航庭をゆくもよ

たそらふもや 夜をゆくもよ 扇取

市間喧

つを木屋のふちをゆく 足形雨蛙

景改り片目孤動りよ 田螺く那

何必逃杯走似雲

ひ忙ぢたところ 道はきりあひ

夏之部

風光別我苦吟身

大酒やちきりて ちきりて 給可南

一ととらよ 後や ちきりて 夏木を

越後屋小箱さく ちきりて 夏衣

このちきりて ちきりて 夏衣 郭公

有明を 面起さく ちきりて 夏衣

川むら 飛屋を ちきりて 夏衣



徳崎やこゝろあせと子親  
めろきの水ぬとらふ杜宇

林中不賣薪

せよちやくや山海とまき民町とらふ  
禁寺 五加うたぐみあまを  
やうきん人びと走子孫ぬ教  
おと交す二おめりハ出るれ  
阿のくまぐよ蝶まくらふう何とたす

上行寺二句

灌佛や拾子制 寺の兒  
滝仏や墓よびうへる印くう  
卯の花やいつまの御所のか茂  
結蟾とふんを卯のをもと勝くり

慈母墓

花水やうらうらる茂系那  
僧正おまきよいとやこの楓



つみなるのちううのまこの牡丹が  
艶まよめて

ハ専にうううり笑ふ牡丹が那  
殿つろくまうゆー桐花ま

たのまけま夢のまんりるふ  
ら〜藤のまよみ〜る 輾り那

妻輾の卯虫中結めらるる  
人のまこと戸い新しまかつをが

芥子くけ花ちる臨の頃涼い

祝産育

たうちの皮平膝の結つ〜り

まよかき〜薄ま月とるん返乃杖  
能化堂まつく僧がま〜きか

田家

子乙女よ足り〜り〜妹〜さよ  
汁端よまのちう〜や早苗〜り



早乙女忠をくれぬ顔と銘しうり

桐農

燒鎌の脊中ふあつて 田子より  
織細沖よりいづらの帆をけし  
形より子未系のうら残織  
花のや免織しうせぬ嵐子如  
公門小入時  
あや免まゝにけり後子のみどりか

お志まゝ女乃塔沃よ入て文うしき  
山笹の線やと免まゝに湯たぐさ  
ら所の戸やついでる葉のあひ線  
顔ぬらふ田子孫もまゝや五月五

題江戸八景

竹屋くハまを六深川の糸の五月  
はらうれや湯の桶を山小りあは  
五月五や君のうら免まゝにけり



五月西やうかきんつる 小人形  
芥の尻を折るきくや五月圓  
下等や 魁根性乃ふくまを  
比戸の山よりしろよ 竹を閑古鳥

僧正う谷

侘しうらり 貝物へ傍よかやとこと  
み鶏啼 叔まよ遊りのつとめ  
鶉やつれて一里にまより 園乃松

和古詩

琴が焼く水雞を煮夜酒沸し  
枇杷の皮をやられえ角あき 壺牛  
宇治よりく二百

葉多しうらうれてさうらね 螢のれ  
川より水よ二重にほたる 壺  
愛娘子

鶏啼く 玉子さふ坂をたぐる 兔



酔く忘

霄の故も枕とくく家ハをり

捕虎東坡

七ツ毛の故よりくむや足疾鬼

可なり火や故帳つるくく老ひり

故をやくや袋奴う圍の私 鏡

生死去来

鳥り故をくくくくくくくく

射者中、交者勝

隗赤よひつまふめくく侍燕くく

りきけさひららるれされくくく

まうく終くくく後ら海くく登の私

海橋よ字指の市じやくくく

くくありの物虫ちくく相色くれ

交代の系きりの林やくく拍

そよ入る月や志あくと不二の山



浅草川道遥

富士のや細代尔火を交秋は小庭  
水宮やま里葱の紫志はし日かけ糸  
夏草や橋甚ましく河西に  
百合の草ぞもぬさたよりのふきぬ  
懐胎の小婦とていさし車百合  
紅粉霞や朝見えし死を夕日影  
初るるや猫の糸目よなる松虫

みるの香や汐と香風の磯訓松  
瓜子や桂の生洲多てとらり  
下らりや朽るぬあそくもまきさか海  
蓬生るるあはれをうぬを虫をさひ

市原よりて

虫とむと朽木は小町下きさう  
秋若姦まきく阿そんてみるる去来下  
死の海を汗悲うを森や夏中人



至多や内儀たましく 物指り

舟中吟

さくろふの筑波増出も里多き  
夕たも如法華のまことむらさき  
夕たもやたのふ乃坂せのゆゑ六滝  
ゆふもちやまをびらうる傀假師  
様扶かこく海をの守やまふれ峯  
あんゆくのかくはれぬのあくるか

祇園殿のかり屋あつたふ

杉の葉も青水無月此法旅の那  
里此子も秋宮よいき鼓うた

七日

絆糸の糸人のきねひもたうれ

山王氏子とく

歌等まろく天下祭や土くる後  
番付と賣もまろり此さやひた



瓜むき程子六者何つさ  
小女乃帯よるを程あつさ  
舟暑く一羽のそく雲に  
身ふく心一を羽織も浮世に  
昼よりいひ

うき程やううはめらる麻呂市  
舟の程又風の垣たる扇うな  
うき舟の風情日々もる茶酒分

序令けい免く上系は後

涼まきく程の找くや連と金  
夕暮海すし交風のちうひう角

涉系川歳々吟涼

舟人数舟あれをてを涼まき  
河ま見え程の派ぬふ縁か事  
まきく程の帆子船渡のまき  
涼をまきく涼む角めり鬼まら



この松子とて生風あり庭涼と  
幼高此月新まきりし涼と外  
上下と裸の多紙 松ふまきと  
ふお肩ととろえらむこ夏早  
夏瘦ふ能因あうも小食たり  
葬子形くや六月郭公  
御杖  
夏杖法師の宿札とろひり

秋之部

文月や冷と感まは蚊窓の中  
七夕や暑あまひ入る節せき  
星合やひの子瘴地乃瓜つと  
ほしあひや山里めちし常此戸  
丸腰の治郎笠とまき星む之  
雨後  
鶺鴒や石城ありし乃撫もる



あさくまや丸太路う屋小天の川

新居

塀梢かまろくろくや銀河

樽買うひとの流まやまの川

り小室お賀まのふもや女所む

二挺立帰棹

整美とやくまらつれなり一室のあ

井の柳きのふ松相のつ葉ふ那

湖か車赤ままきとや水結まの

あさ顔やまれまのふはく穂口の物

あさくまやまらへんむ人を休格子

まままみ出けまうけおの漬

物う屋や穂不出るままま送あおれ

葬りまらふお乃二葉ふれ

市隅

西側よ焼籠ちうれや三日結月



えり人も子りり灯籠平出りり  
遊山火也葦の系と名やた戸遊  
あつてはふかのあつた玉の夕顔う那  
たつちの口は借金乞無なるりけり  
柏野や花うたあまきハ才子坊主  
送り火や定家のあつた十文字  
測り隣あつた免や生かた後  
さし結と廣間平羽とよりり

喜山名をきく

躍子あつたつた山くへ早を北  
上手かと名を優美たつた角力死  
ト石也志やう小ぬれとつたすまふ  
小屋涼し花火あつた筒の口もつた  
縮妻や朝暎しきたつたあつた又  
齋院あつた戸さしきあつたあつたや  
和らりあつたあつたあつたあつたの外



宇治山水

川流や葉立のち乃跡一か減

中のみあき

幸清久旁跡予のきやせうく一松

森まきまきまむすひふそやササ芽

萩あきもろね菩薩みてんし上童

藤ふじまき新そ西瓜子枕借も男

たたささみみああ蛤貝赤らまきり

井筒跡まきる画よ

いそたのこみ竹輪まむまふ清うれ

角文字や伊勢の燈籠の花落

せふかを松

疎跡みや薄紙かけそ小松系

二目まき

岩のうへり神風巻しをね芒

沾徳餞別



点きつて人知者うれむすれ  
 牛ふのる 嫉水落そま女郎花  
 ちを成糸あや 荏も角せうくし危  
 芋炊う煮て雨を空風の屋とりか  
 死爪喰ふ物ふ安達り系たれや  
 妓子万三斎成悼く  
 折打よあううやのる 蝶のそま  
 鬼燈のかうせえううや 蟬乃あう

とき月や髻成たうううなりくす  
 戸くうもよま虫さこのは 浅茅うま  
 まむじや松ぬさたへ 着あせうく  
 蜻蛉やくうひま川きる 三日月  
 歌湯豆腐  
 阿との湧り雁成濁さぬ豆腐か  
 隣家よえ弦とくせ  
 大絃ハ晒せえ結可 落る唇



雁の腋見送歌をやあひ結上  
 志ろ雲より花う結をさよと救ハ雁  
 泥龜の鵬平運とる回少くも  
 平家の表を悟るふ  
 あり来く福系と流鶉と川  
 木兎や百舎よとあり巾リを  
 秋葉禅定下山  
 加し多に杖を投るあひさか

悼朝叟

比人平二百十日をたき流し

春日法乐

今幾日あひ結表結と春日や戸  
 砦の所妻吼る犬あひ結也  
 芭蕉庐の表  
 墨染を鉦鼓と隣るさめく外  
 ある長老のりやあり



中のりよ森ぬ子衆人さくらあはれ

和水新宅

さへ植殖喜紙仕舞へも礎うた

あ戸ひきの歌なり

甲斐約や江戸へくと柳葡萄

睨めや泉函谷やらふ聴る近

盆と梳せ画

中梳虫思ふも水意よ三日如月

玉津島帰望

月のみうつ更井如月を教るあれ

燃杭可火あつきか夜き月夜外

庖丁の片袖くくく月乃を

月のささう詩の舟り山市川武り

所思

ひささひも公法くしや十四日

待宵や明月を二見へ道者くれ



本母も前、家の會ありらあのみ  
鳥帽子をハる海しきくもあう

雨

豹とあう、金買をとりきふは月  
川をちる、舞をハる河けあのみ  
汐波をのこえて、月をやらあのみ  
後濃文畧あも老う子ありきふは月  
酒くさ支鼓うちきりらふ乃月

風雨

雷子、楫ハちひちを月ハる  
名月や居酒のまんと頬あふり  
名うや、舟をさくむるサく崔  
名うや、金くひ子の取あふ  
新月や、いつをむらゝのせき山

待乳山

と青満と掉あふらん子なる鳥



松前の君よ中あらる

こき吹え大根きき母 殊の月

如是果のころゆを

二子山ふと子むろも家栗結う

泊瀬女子材の志ふさび思ひりり

子籠の袖結糸よのりし白ひくれ

南天やおのり実月空結山の朽く

菊天や殊残の戸へ敷小倉やま

たきごりのや鼻乃先なる家分あつこ

稲葉見よ女待そへ せきこ川

早稲酒や稲荷をひ出す姥よりと

足めの家亭主ふまへを新酒かま

横儿追悼

一歌と手向りともや 新糍

とこややをれましく思ふ若る麦畠

生海と家雨雲とちぬ生駒山



かるふぬまきて山路の菊と三時  
 ありしと道を行わる菊は宿  
 宮川中なりと酒送るせうれそ  
 重箱と花をささこの野景が  
 ● 井苑のせと船きたみせうしそ  
 出世者の一りせうしはるり葉  
 時服は葉ふとまきく忠色うな  
 九月九日扇を指ひたり人ホ

きや名も星花輝く礼あふ  
 手入のなまき阿家飾るむ何し菊  
 産寧坂とくりて  
 菊紅葉ふも多路とくもちうり危  
 ちくもさち水やけきき流るめり  
 母と月見きりよ  
 寝る寝ぬ六雨元改の十三夜  
 うまうさや江尻と三穂の十三夜



あつそむ茶師を旅森の十三歌  
やと月夜を物なきに 木挽早

戸越山庄

むらぬ家北往の實をほくく白くぬ  
谷へつゆ荒れまゝの紅糸ふかり

新殿六間港

あつそぬ塵のそく免や下紅糸ふ  
糸のつる糸世やとまわりて出まづ

霍り岡古樹のかきんこ

あつし代の供奉の扇やちる銀杏  
洞房の茶屋字兄生家の笛を好らる  
うきるお悼る

あつへや笛吹くあつそぬ塗足履  
見し月や大くそれく 九月尽

九月尽

森ぬ表松風牙のうき妹を師走哉



冬之部

神無月ふらう葎有りまの夜まき  
言砂や孫宜の湯治の神無月

東河の祇園を清水とくえを

揚弓よ名の伝どんちや神無月  
家くの留玉居たる形り 大社  
あまききけと時ふる秋の鐘の死  
響かす片日ありやむししられ

當麻寺奥の沈みく

小秋志くま人せ牙まき山居る形  
松陰忠の魂示息と志られの南  
三尺の身城ある河の志られるを  
守山の子よめり城並月時ふる形  
爰とらりう見をくぬま長むく時  
風よ文畧世有りむろハまきぬみ形し栗  
このりしとちりぬ地子のうらせ貝



曲翠と幻住庵のわと紙巻く

まゆりしもすくぬ嵐乃本繁うま

志ろく毛戸し枯木の夕つく日

うしひらる三井の二王や冬木立

何葉の赤みく血流頂戴のくくみきよ

紅葉の下船も何く人み結こりれ

玄猪とや祖父結うふ枝折痔

帰花を後まも志のんむくきれ

埋火や土釜のをそく等り焼

閑居安慰

扇く扇弓の爐我跡さぬや灰きき

寐ぬる海や巨魁ふらんさぬらぬ

火爐のくくく藤林まき葉と枕とん

炭竈や鈴木飛井の朝のまゆ川

炭うりやお虫ろかん清水鼻とらる

かた炭もそお木家あより發りらん



法重も老傍春色と使へり

源氏もや季吟の家出垣子孫  
福天の床札も其名や仕切帳  
子ハ衣袂親らつ子なり夷譜

新巻

嵐ももなつてなうしらんを籠  
蕨のたうそ根う名お型をかまへ  
さくくくと聲か免やふゆあり

このときそらを頭巾もとそらう形  
推人のとあ結切とく火おう那  
お仙よを分やや思ふて教

對友

肉孫の古酒をねるお室結栗  
お跡そのハ先ら形とくと大根引  
去賓とせよ又るさより干菜より  
宗吾の猿味嗜うき世平配る納豆う菊



つゝ孫才兔の耳を引たると  
 金糸ののおのまじとらゆる 平野の起る  
 野のまの敷陰は槌の音しけるに  
 秋波冷く隠者たつゆん 柳のま  
 ちのまの何とあつるを 舟の中  
 接尾の信どのま  
 粟めーの焦く匂ふや ちのち  
 のたまきーかられぬいとけ ちのちの蟹

せかり、舅城とよや 河豚ー

ふきかの浦やめらりま

純ひよのこころ 細引うね  
 ちく汁や祝言のまに能りやり  
 妻ちうぬ教をうみそ 小教衣  
 鯉糠をちうさけるれハ 厨の那  
 足袋うりやくいさあれを 学 經  
 蛸むきふ ちういんぬ ちのち



鯉ひと川河一ろ香秋のまゝひか

梅津某秋思致をて送る侍

あま吞産をふつて細代あり

細代より大根ぬれをさるもなり

市偶の侘人

宮某兼をさるしをさるえ交合なり

越後屋の算盤さるく小おちり

席ちりり吹く秋明の夢おちり

けり香や雀の扶持乃小土器

けり香や赤子小くさる 朝 朗

市中閑

初香や門子 橋めふ夕戸ふ

を空笑ふ 香りの沽を也 鶴の香

まらの香をさるふはくくの下りり

きぬく又大城をらふや 神の香

埋れぬぬみ務ふや 香の友



吾の日に花うらうらう乳思ふ  
枝出しくもさおほくは柄少  
吾おりう新のかき葉よみききん

雪窓

換科の史記も師走の曇う事  
殊千あへ師走の菊も 妻も  
南級千あそふ松耐  
雪窓や南大門也 水也

わの川交の筑波ふくつや  
落季いハ左耳 一  
燦もふくも 女房めつりや  
うちあそふ新所中やす  
のち花や嵐々目所  
中し 結市誰どううん  
しやも板戸あそびし  
ゆくしあ唾をらん



此年や壁ふたをちくちくかき  
子をめくはるの影久き年の昏  
海中の散下みくりり年のくれ  
巨ぞうの影のうらむる笑かた  
年越やまゝ業事の法種ひき  
大海日ぬりつこちう年とほき

聖代

鶴ありくく目くそかほきふ大鳴日



